



千葉労働動向

国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号(動力車会館)
電話 (鉄道) 千葉 2935・2936 番
(公) 千葉 (22) 7207 番

No. 3168
90 2 26

糾弾 国労中央2月末スト中止! 「事業団」の仲間を見捨てるのか

動労千葉はスト体制を堅持し、怒りを充填し 二月決戦へ!

国労中央本部は、JR当局・JR総連革マルの暴挙とも言えるスト圧殺策動に屈し、二月二日夕刻、二、二六からの七二時間ストの中止(延期)を決定し、各地方本部に指示した。

国労の各分会では、スト体制確立に向けて全力で取り組んでいる矢先の中止指令であり、現場で

「中止の「理由」なりざる理由」

国労中央は中止の理由として、「東日本と九州を除いて中労委の呼び出しがあれば応ずるとの態度を示した」としている。JRが中労委の呼び出しに応ずる、などと言うことが、どうしてスト中止の理由となるのか! そもそも中労委に全てデータをあげることが、清算事業団闘争の敗北、清算事業団労働者の切り捨てとしか結果しないことは、火を見るよりも明らかではないか!

さらに、「二月末解雇予告通知を出させないことに成功した」というのである。これも、全くのペテンに他ならない。一月分の賃金さえ支払えば、解雇通知は三月末の段階でできることは、労基法にも明記されていることである。加えて、「ストを執行しても状況の進展の見通しが無い」と「判断」したというのだ。

「前進しないからストを中止する」このようなスト中止の理由がいったいどこにあるというのか。なおさら団結を固めストに決起し、展望をこじ開けてゆくのが労働組合の闘い方ではないのか、現場には闘いの力が満ちているではないか!

これでは乾坤一擲のストに起ちあがっている、現場組合員が納得するはずがないのだ。

なぜ! 国労中央の誤りの核心

現場労働者の苦闘を無視し、動揺を重ねる国労中央の誤りを厳しく批判する。

その第一は、国労指導部の、清算事業団闘争に対する根本的姿勢の問題である。国労中央は、この間一貫として、自らの闘いによって清算事業団労働者を奪還する立場・方針に立つことなく、労働委員会に全面的に依存し続けてきた。その最も端的な例が、「北海道、九州原地採用、即本州出向」方針であり本州切り捨て方針である。労働委員会は、言うまでもなく体制側の機関にすぎない。二月末ストライキの全面的屈服は、労働委員会依存主義の必然的帰結である。国労指導部は、二千名の清算事業団労働者が、必死の決意で闘いを貫いていること、そしていよいよJR本体の労働者が、この不屈の決意に添えて、実力闘争に起ちあがるうとして、まさにその時、その決意に添える立場も路線もなく、これだけ有利な状況が切り拓かれながら、指導部自らが理由ならざる理由をもって、二月末ストを挫折させてしまったのである。

第二に、国労の真の利益や、現場で働く労働者の利益よりも派閥政治を優先させ、その利益のためにのみキユウキユウとしている革同・協会派指導部の問題である。これは、国労自滅への道である。こうした否定すべき現状を突破・克服せずして、事業団闘争の勝利も、国労の前進もない。闘う国労組合員は、必ずこうした現状指導部の屈服を改革し、のりこえ再び起ちあがるであろうことを信じる。

われわれは、不屈に闘い続ける国労組合員と共同し、共通の敵JRとJR総連結託体制打倒の為に、奮闘するものである。いずれにしても、二月闘争の課題は全て三月の決戦過程に繰り延べられた。

動労千葉は、以上の情勢に対し、緊急に執行委員会、支部代表者会議を開催、各支部において築きあげてきた万全のスト体制と怒りを蓄積し、三月闘争に全てを集中することを決定した。われわれは一二名の仲間を奪い返すために、持てる力の全てを發揮し、三月闘争に総決起する決意である。全ての組合員の皆さん、怒りも新たに前進しよう